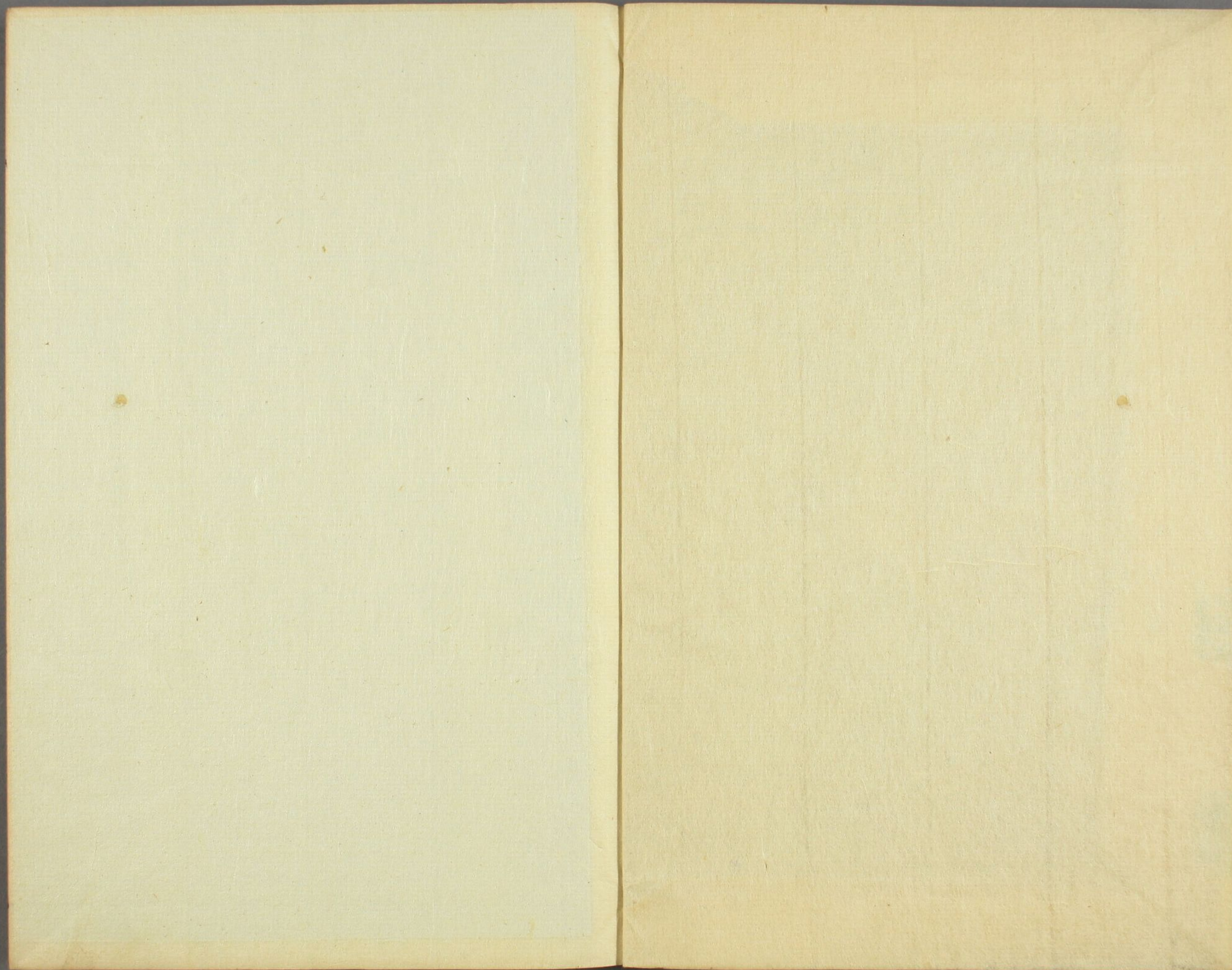


竹取翁物語

一





竹取翁物語解卷第一



飛驒高山 田中大秀 著

かきや姫おひる

今ハむう〜竹取翁〜
あけをさ〜
みち〜

○今ハむう〜凡〜物語と云をけを過去し更を後までおゆぶもの
たるは此物語を始〜世々は物語ぶ〜今世の俚〜物語に至ても猶
昔〜談出るたあ古き效なりけ〜む〜ハ遠〜も近〜も過〜

以前と云言なり。安閑紀に往歳古語拾遺に久代とのに常と疇字書
 疇ハダシ也。左傳註。疇昔猶前也。昔字ハダシ左傳疏。而今而稱也。曩爾雅疏。在今而道。既往也。昔字ハダシ上世謂之昔者也。卷子ハダシつりゆ時見る毎に心いり年可之の人し思ほゆるかも
 〇竹取翁ハ竹と採る物造て其を鬻て世業ナリハヒとひまば世人然シカ
 稱し由なり。〇といふ者何りばとハ伊勢物語十五に昔紀有常とい
 ふ人をけり。大和物語十三に右馬允藤原千兼といふ人は妻を俊子
 とりふ人ぢん有らむ。なほ例に從へ。いづると本ハ惡く〇野
 山ハダシはじまてハ古今集春下に今日ハ春の山邊に交なる暮なば
 なげの花は陰のほ。後撰集春上に春雨のふらば野山に交なる梅の花
 笠有と云なりぬらむ。交ハダシと云言今ハ彼と是と互に相雜ハダシとのと云

ど古へも山ハダシ入野ハダシ入をも云しなり。〇竹と採る此ハダシと云言
 して通る聞ゆ終に猶言と云重ぬべきと省つる意なり。古今秋上
 山里ハダシ秋こそ殊に侘しけ鹿の鳴音に目を覺しつゝとるも度く
 目と寤ハダシしゝするよしなり。此も其定に竹と採るゝなり。伊
 勢物語八十にかくしけさうて仕まつりけるをともも同し。〇よ
 ろつね。更ハダシハ類本に從つ。宇治拾遺物語卷六に加茂社に祈る米
 を万にけりふにと何れハ更ハダシと云言なり。本も惡く。折籠ハダシの類
 派始る竹の用多き更數へごやし。今昔物語旧本に載るるハ竹を取
 る籠を作ら要する人ハダシ與へ其功と取て世を渡らるにたり。此
 るハ略々と〇さぬ。ハ翁の姓なり。諸本とさす。或ハサとの字とをさ

類本より従つ改つ。大秀既よりその誤なりと云置つるの按より不
 違さしむ。姓氏録右京皇別讚岐公、大足彦忍代別、天皇、子五十香足彦、
 命、之後、と何れとも是を誤り又和泉國皇別酒部公、讚岐公、同祖神、攝別命、
 景行天皇、之後、也と云は、亘しき由師記傳并四、卷九、皇、子、の、姓、を、賜、し
 更續後紀卷五、六丁、よりん、和氣朝臣、と改ひひ、更三代実録卷九、ハ丁、よりん、由
 此姓なりと云ふと思ふ、由下十三、ト云ふ、○こやめとあるは名な
 ことハあづま、と云こ、諸本皆脱きり下より従つ補つ造ハ御臣ミヤツゴの意
 なる由師記傳卷七、説なり

此竹のすまモトはひよりけ、一筋ヒトスヂをたり、何や、しづり、寄てえる。
 りツ、筒ツ、は、この光よりそはとふ、さばこと寸サ、ざつゝなる。人いふ

まゝとてみたり

○本ひより竹云ハ其光を奇アヤしく、猶能見さし立寄るゝるゝ其
 光ハ筒中より出るり又其光を見れば、其中チゴに小兒あり其の光なり
 きて、小兒の光なる由此ハ不云ク、此兒の容、躰云、知屋、内、光滿
 りと云、此竹の光ハ即此兒の身より出なる由あるはあり○
 一筋ヒトスヂ有りけ、抄本に竹云ハ一筋をばり、寫本にむんと云、下と
 けと、り何も辞格チニヨハの、今ハ寫本に從つ下を改つ○よりて
 見る、ハ抄本に從つ、按本に取ら寫本に、足、び、と、り○筒ハ和名
 抄、唐韻云筒音、同、一、音、棟、俗、用、去、声、竹、名、也、と、云、訓、を、漏、き、り○三
 寸計ハた、る、人ハ抄本に從つ、活本にハ計の、と、り三寸ハ字音、唱、べ

下天羽衣の段 菜種ナタネの大きオホキと云ふ竹中タケナカに人有し例れいならずも附録つけろくに載

つ〇うづつしい古事記コトワザに愛我那迹ウツキナニモ妹命イモメノミコト乎とあると齊明紀セイメイキの御製ミツクダ

に于都ツ俱ツ之ツ枳ツ朕ツ稚ツ児ツと有ツ依ツ愛ツ字ツとツうツとツしツきツ師ツ傳ツ訓ツま

るツ落ツ凹ツ物ツ語ツ 卷 右衛門 督 甚 白 う ま つ ら げ な る 子 は 三 計 な る を

膝ハシに居ス愛コトのミおのりしまはなり何ナニり頭書カビに俗ソコに愛アイラシシと云クの如

く顔オモより人ヒトを常トヨクまうつしと云ハ貞マコト好ヨク人ヒトを愛コトと思オモふを云ハ云フな

るコトとシと云フの即ソレ加カふまと云フハ非ヒといハり

いいふふやうわまならむさと夕やま思ハる竹の中ナカには坐イるはならむまて

たらぬ子にならずはならむ人ヒトならむさとまはならむいいふさに

はならむいいふさにならむいいふさにならむいいふさにならむいいふさにならむ

〇子コ成ナりふべはい我領ワケする竹中タケナカに坐イるは依ヨ籠コと云フ意イを兼

る秀向ムカなり〇なめりいないはあるを約ツクする言わるはなと唱

しめる俗に云フアラウと云フ意イなり〇家ウチに持テ来キぬ家と何

れまぬ家へ云バゆくと云フ格カならむとある本ハ此に不合今

と類本ルイホンに従つ〇妻メハ和名抄に白虎通云フ妻メと何と〇おりおりい

今昔物語イマセキなるに姫ヒメといふ女とかける誤アらり故コ改メつ和名抄

に説文セツブ云フ姫ヒメ 和名抄 老女ラウメ之ノ称ナ也霊異記に姫 於 干 那 と 何 り お り お り お り

れと云フハみと音便ヒりもむも云フと正しくと意美ミ那ナと云

なり師 記傳 卷九 云 く 少 を 表 美 那 を し る の 更 ハ と 云 ひ 對 く 大 小 を 以 て

老と少とを別て稱なりと云はるり猶下を可考 ○をさるるは

長くしうぬ由る賢うぬ意なるは此の形骸の少なき由

なり體の小さいハ少彦名神と思べし ○籠に入ふハ抄本ハ箱ハ

りて造まハ此ハ附なし今昔物語なるハ籠と何まハ諸本ハ後ハ和

名抄ハ唐韻云籠和名 竹器也と何り今世是をかごとハ堅間籠と

云言を畧けよと何と云ハ竹と取方にけふと云まかなひ

籠といふ方ぞ附くとしてあらし

ふけとらぬ竹と云ふは此の子びえりてなる竹と云ふは

を福と云ふは竹と云ふは竹と云ふは竹と云ふは竹と云ふは

を福と云ふは竹と云ふは竹と云ふは竹と云ふは竹と云ふは

かゝる竹に竹と云ふは竹と云ふは竹と云ふは竹と云ふは

○竹と云ふは竹と云ふは竹と云ふは竹と云ふは竹と云ふは

竹と云ふは竹と云ふは竹と云ふは竹と云ふは竹と云ふは

竹と云ふは竹と云ふは竹と云ふは竹と云ふは竹と云ふは

竹と云ふは竹と云ふは竹と云ふは竹と云ふは竹と云ふは

竹と云ふは竹と云ふは竹と云ふは竹と云ふは竹と云ふは

竹と云ふは竹と云ふは竹と云ふは竹と云ふは竹と云ふは

竹と云ふは竹と云ふは竹と云ふは竹と云ふは竹と云ふは

竹と云ふは竹と云ふは竹と云ふは竹と云ふは竹と云ふは

竹と云ふは竹と云ふは竹と云ふは竹と云ふは竹と云ふは

段こ二をみるる... 於記傳并八の廿六丁... 〇〇〇〇... 豊饒の戦...
 貪一のり一翁一度一金あるを得て豊饒... 下勢
 以猛の者よ... 此故なり

此も... せん... 月...
 け... 帳...
 ね...
 ね...
 〇... 和名抄... 老字注云赤子不害物... 和名知子... 今按云舎乳之義也

紫上の... 十... 下の...
 〇... 古吏記... 明官段の... 大御歌...
 久... 傳... 滞... 速... 速... 速... 速... 速... 速... 速... 速... 速... 速...
 此も其定... 小... 急... 大に成... 枕冊子
 四... 歩... 俊蔭巻... 仲忠の... 此子ハ寸
 〇... 宣陽殿の女御の御史と
 〇... 日隈葛巻... 卷十五... 宇治拾遺三... 雀子
 〇... 大に成... 此す

すも〜や〜同意なる。獨異志に晉趙末八歳一夕俄長身長八尺鬚鬚滿額と抄。又三ヶ月をみるにや〜ほどは疾なり。こ月をとりけり〜何と○よ〜人よ〜常並の人よ〜○髪上の縣居翁の説に凡古の女の髪は幼なり目〜額の髪目と〜肩のあかりまで下〜末と切〜放髪とも童〜まなみ〜子〜藤井高尚主の伊勢物語にふ〜元と不結放〜子〜山と〜万葉に〜のふり〜結〜ハ〜なり〜不切〜長〜し〜十四五歳〜男〜垂〜

ら〜わ〜万葉に橘の寺に長屋に我為祓し〜髪上〜是ハ男〜後 允恭紀に七年皇后曰妾自結髮陪後官既經多年〜是ハ髪上〜師説に凡〜女〜長〜髪上〜ハ上代〜の儀〜飛鳥浄御原官御宇十一年の詔に自今以後男女悉結髮〜何〜を思〜上代〜ハ今〜結集〜結〜末〜彼詔に結〜ハ頭上〜結縮〜髪〜是〜允恭紀の髪〜同十三年ハ男女四十以上髪之結不結任意也〜又十五年の詔に婦女垂髮于背猶如故〜ハ上代〜風〜故に此十五年詔の後ハ万葉の歌も髪上〜多〜

此程の人子成ぬまのいさむを議定むる更なり忠こそれ巻子千蔭の
ぬかす内子ありてさぶあはくこころほふるまはしく守治拾遺巻九子賀
の女孫人宿しはるゝ觀 此人くのゆふさそつゝあては食物あてさ
音姫は化て物する知は だしあまて出ぬさそて今他は沙汰の字を用わらハ音も意ハ
大抵同じら後ハ填するとのなり字書を謂沙汰使之冷然也ま
る杜詩注ハ以節貯沙去其細而存其太曰沙汰とあり物を議定ハ
凶とすて吉ととほいんごへよく叶へり○さませ上のま字法本に
なれハ脱きさるゝ信し今ハ校本より枕冊子ハ殿守づのさこ
そよれ人よまぢせよはりしあはれはくまはりしはく物持せども
は甚多の言なり○裳イトオホぎん抄本はなきハ脱きさるゝ和名抄子釋

名云上曰裙下曰裳和名梅枝卷明石中官十二の時張もきか多めりいゝ
云西の成ともは成の時も海りけふ宮はぬりしまる西の枚出と志
つゝひもはるゝはる髪上の肉付なるとやして此力もさきより三子
の時ハ張もももあはれはくまはりしはくまはりしはくまはりしはくま
しと宮秋好又あかりけふ髪上若着同時は藤原君巻子阿て宮ハ清年
十二とひく二月ハ出雲も程もなかくめがはるはるはるはるはるはるはるはる
映姫もさるゝはるゝはるゝはるゝの姿はなぬるはりさして若着袴若さハ
腰結と云くあり李部王記ハ康子内親王醍醐皇女母中官初着裳
小一條左大臣師尹親王外舅実ハ親王の結御裳腰糎子基經公女水左記ハ敦文春
官白川天皇帝一皇子母中宮賢子関着袴也關白殿結御腰給和訓

芽
 又も從腰結の更物迄おどもま多く又〜つり年富き良人と請じ
 て腰結〜き〜し〜ち〜り〇ち〜抄本はいまちや〜し〜何れどは
 帳と何〜し〜勝〜し〜和名抄子釋名云帳猪高反音長張也施張於床上
 也小帳曰斗俗云斗帳一云屏帳形如覆斗也今按帳屬有儿帳之名所出未詳と
 又く類聚雜要抄卷四帳の図を裁り方八尺高七尺一寸土居と
 き柱十二本一角本三本立桁四本をか〜天井金銅の金物を以〜飾鏡二
 面と〜く枕方足の方子帷をかけ兩眼ハ儿帳と〜中子疊三帖
 敷り圍なり委ハ此〜云〜催馬糸〜心〜見ハ〜り帳を
 も垂ふるを大君まよを婿ませ落凹物語卷四帥と四君子合と
 四君子は帳の内子病〜り此方ぬ〜し〜る〜帥の文〜て来

るり男君ともけひて〜ル帳の内子〜入〜北方取てを〜
 とふ〜し〜ぬ〜る〜大抵帳の形を知〜按〜此上
 子詞脱〜急〜〇〜ハ縣居翁
勢語の説〜し〜神子仕る矣凶穢を忌〜清〜仕〜
古意い〜し〜人〜凶を忌〜吉〜
 こ仕ると云〜卷九勝鹿真間娘子錦綾のす〜
 齋見も妹も〜女母も父君〜
 げ〜し〜カネ〇〜諸本
 〇〜下
 の段も光満〜け〜居〜人あり忠〜あこもの〜開

きよしちりしる限よしとる此す同じけり清ら言を音使
みかくる落凹物語卷二正月一日の色とり始ていせはるるま
影ハ又卷二ハ講の佛佛きさるるたうとくは入はふ又同捧
いせけりたる緋の糸と源氏物語もききしけり
み〇世まなくハ世界は比類なくなり相壺卷二源氏君とさよなくたよ
らわゆる玉の男の子さへもたれぬぬとけり〇屋のうら暗きや
らぬハ赫映姫の光徹ハ陰なる処まもはるるにさしなり〇光
満ハ九恭紀七年キヤキ皇后奏言妾弟名弟姫焉弟姫容姿絶妙無比其艶
色徹衣而晁之是以時人号曰衣通郎姫也雄略紀ハ天皇産而神光満
殿ハ俊蔭ハ卷二のりと形さるるにけりかぬたしけり光かぢやきとる

人まむにまぐさゆ又此女の生玉光ハ炫ハやく男の子をうと忠
こそぬるる身ハ光ある人の例やり〇公ハらるるけり
かゝいへハ是等身ハ光ある人の例やり〇公ハらるるけり
腹ハむらむらなるる法ハなるるけりなるとまみとあはれ必
街ハむらむらなるる法ハなるるけりなるとまみとあはれ必
生ハ童子顔顔端正令入樂見令以下四字不空の記ハ桐壺卷二
源氏のいへるるふ仇敵ハなりとも見てハ打たせぬばま
まはハ信ハ若紫卷二母ハ云ハ詞ハ光源氏ハはるるはいてま
はるる母を推ふる法海ハの心ハはるる世に怒りハはるる
る人の出あはるる明石卷二入道源氏とほのりたてま
老ハはるる

翁舟とあるも... 勝まり此の上... 漢音バウ呉音ミヤウ...

○此段抄本ハ久々ナリ...

○あつゝ猛莫杏切健也...

漢音バウ呉音ミヤウ...

物語ニハ三位中将清...

て請ふ宇治拾遺...

いも猛なりとある

此子... 附秋田...

げあ... 万葉...

○とむろと地名...

歌云玉匣三室戸山...

と後... 山城の宇治...

宇治拾遺...

らも隆家帥の弟...

名の下... 齋部...

わすれ... 冠辞考...

○竹取翁物語解卷一

かきつりて名湯竹のこころこころ具はるゝ和なる女の姿を形
よやのちる竹を譬て冠るもつり。ちる竹ハ女竹をて皮竹とも云々
殊にねよつてんももあハ然云といひけき。常木巻空蟬の人つら
のふもあきつるは剛ま心とさひひ加ふれハたよ竹のこころちして
さひつる折つてもあへんある竹より出づる人なほハ女の手弱
やのちるもあきつる。奈用竹めて踊るなり○かぢりひまといひ
古板本よとる類本よ附つて抄本よ付とる。こころこころし
と云言ハかゝる処よ かぢり姫ハ むつろ容顔と称し身ハ光映ある
有へき言よあす かぢり姫ハ むつろ容顔と称し身ハ光映ある
更を取て附る。かゝる古更記の師木玉垣宮段ハ天皇垂娶大筒木垂
根王之女迦具夜比賣命生御子表邪辨王、と何。此后の名を取る致

と河社ハ河を師云迦具ハ赫と云意其ハ迦賀とも迦藝とも迦具と
も迦宜とも活て同言なり炫ハ迦賀と訓了靈異記ハ炫を加く也
計利と河と火之迦具土神炫 云まお大秀按ハ夜ハ加賀也久の久
を省て也と云る致とも思つて狩考るに師の高比賣命の致ハ阿那
陀麻波夜とを波夜ハ光映も照曜を云なり速玉之男熊野早玉
神社に終るも皆映玉の意なるを思へ又木花之佐久夜毘賣命の佐
久夜ハ開光映の伎波を切めて加なるは通りして久と云なりと記
云終るもハ彼后の名も迦具波夜を切て迦具夜と申意なるもや
明けし終るハ此物語なるも具を濁く迦具夜比賣と訓了きて大
筒木垂根王讚岐垂根王此二王之女五柱也と何。此后も其中の一

柱なるはまゝし其御伯父讚岐垂根王なるを思よりて讚岐と云姓も
 何處ハ此竹取翁と云ぬきの姓と爲るもや何と云こいふと思
 うはるハ云やなり 前より云置つるは後より類役本と
又云ハ造麻呂の姓さぬきとありま 後ハ大鏡の
 小野宮左大臣にさういふはる女房とめしつひひばるほどに
 此のつらう生ひつらる女思かや姫と申はるはなり○云
 何げハ古史記の 日代宮ニヒルロヤカヲトモトヨビテ
 言動為御室樂と何りて傳へ樂ハ宇多宜と
カヘク 訓ハ拍上の切まりなり 顯宗紀ハ天皇為室壽曰ハ手掌摺亮
タニハワカトコヨクナ 拍上賜吾常世等と何る是れ酒を飲樂て手と拍上るより云る名
カヘク たりと又も鈴木氏云何ぞハ次第ハ聲高く拍と云と云はる藤原君
 卷の 上野宮何て官の價なる すぐ七日夜と云れ何りて打
女を得て酒宴しゆは

何げあはるも何れ俗ハ嫁入の時の誓なるとの婦翁は行の始行
 うる時の酒宴を美濃と云切ウナヤゲと云飛驒と云 正ウナヤゲ
石屋戸 と云是古言は残るなり ○其の何と云ハ古史記の 爲樂
石若日 何と云ハ 子段 日ハ日夜八夜以遊也 阿蘇 阿蘇
ウナヤゲ 勢其大御琴と云る傳へ九歌舞蹈管絃を皆何と云はるハ体言に
 何と云ハ ハハ ハハ 何と云ハ ハハ 何と云ハ ハハ 何と云ハ ハハ 同意なるは何
タナ 態もハ云中ハ歌舞管絃ハ遊の至極なるを殊に其名を負るは
琵琶 と云はる枕冊子 琵琶声ハ止て 殿上人の御局の御局ハ遊
鬼の酒宴ハ あハ宇治拾遺 一巻 鬼の酒宴ハ 翁ハ舞出する処 酒あはる 遊 何と云ハ 年
祝 此はあはる 祝 何と云ハ 祝 何と云ハ 祝 何と云ハ 祝 何と云ハ 祝

初花卷寛弘二年土御門家
行幸に用意の処に おがしりしむせぬふは安きしも大

とほむもびやむほむほむと知し〇層ヤミの夜ヨも出ても穴アナを

とほむかよりのぞきいませむひあけり抄本ヤのよ

ももかよりのぞけいませ古板本ヤ層ヤミ夜ヨも出ても穴

とほむかよりのぞきいませ古板本ヤ層ヤミ夜ヨも出ても穴

とほむかよりのぞきいませ古板本ヤ層ヤミ夜ヨも出ても穴

とほむかよりのぞきいませ古板本ヤ層ヤミ夜ヨも出ても穴

とほむかよりのぞきいませ古板本ヤ層ヤミ夜ヨも出ても穴

とほむかよりのぞきいませ古板本ヤ層ヤミ夜ヨも出ても穴

とほむかよりのぞきいませ古板本ヤ層ヤミ夜ヨも出ても穴

とほむかよりのぞきいませ古板本ヤ層ヤミ夜ヨも出ても穴

とほむかよりのぞきいませ古板本ヤ層ヤミ夜ヨも出ても穴

鏡シヅの刻ハ剗ハ同鳥丸反剗也挑也
割也久自利惠留 沙石集卷六邪命説法ハ三千世界の人

眼メとくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくく

くくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくく

くくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくく

くくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくく

くくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくく

くくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくく

くくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくく

くくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくく

くくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくく

御文如くぞ耳にも聞いませぬ。仲忠は琴を勧む 左大将よとてちがひの言ふは

し馬ふ女の夢は、今おの法祿より其をまゝとて春宮ののめは

すももも生し立ちし女とてまむしのこゝろをまむしとていへたり

是ハ貴人なるものすやと云るも皆同意なり又妻とて云ゆ

同じ祝詞に語問志 磐根樹立草之垣葉字 語止互 と何の言と即物

云と云意妻とのこと此言どののいひもて全同意なり訪問の意

猶大和物語百三 中興の近江女ナカニキ 此女ムスメ いかゞ傳て皇子カレキ 上

陸部リクベ とびひやくと帝ミカド ともむし合アヒ せむらひとていへり遣ツク 呼ヨソフ と云意とやうなり

人の物モノ ももぬきしははるかに何の事ナニ なるか

えぬ家の人イヘノヒト もぬきしははるかに何の事ナニ なるか
むらと解トキ せむらひとていへり遣ツク 呼ヨソフ と云意とやうなり

○上の條ハ先一とありて又此ハ夢とて云文法なり○このいひも

も此コノ といひ物モノ といひまなむ物モノ といひ物のあともお所トコロ と云ふ致

猶叶ユダヒ たりともゆゑに必誤字何とて按アタ せし人の物

いひもぬきし人も不居所ヨラズトコロ と云更さら にもあつて不用更イラズ するさす

何ナニ の験シメ 何とていへり紅葉賀ベニハガ 卷マキ 藤壺三條宮フジウラミヤ 坐時イマス 源君訪タケノミ ひねふ処トコロ 子

けきも恥ハにか たりといひ何のきもいひぬきしとていへり

何ナニ のこととていへりいひをいひぬきしとていへり

吉田千足キクダチソク 尾張オウヱ 人ヒト といひぬきしとていへり

こまねをのしりてく人。多うりい小町壮衰書。君臣子孫争替
姻。於日夜富貴主客競。仇儼於時辰。とまよ似り人字ハ抄本。後て
加へ諸本多うりい。とまよ古板本よりて削つ

たろのぬ。人ハやうやま。何り此ハ。しなかりは。あま。て。不。来。や。り。に
り。其。中。子。狩。つ。い。ら。い。色。好。い。と。ま。か。ぎ。り。五。人。ゆ。め。の。止。と。此
那くよ。ひる。集。ら。せ

○意慕ふ人々多うりい。終ぞ大方ハ。や。し。と。思。切。て。退。つ。る
み。此。残。ま。る。五。人。ハ。甚。く。心。深。く。思。惑。つ。ふ。人。く。な。り。○。此。ろ。の。い。ぬ。く
ろ。う。た。ろ。そ。う。な。む。と。ま。言。を。省。つ。る。な。り。万。葉。卷。聖。武。天。皇。賜。酒。節。よ
す。ま。ま。行。と。道。ぞ。凡。可。爾。や。ひ。く。行。な。夫。夫。の。伴。古。吏。記。定。禮。宮。段。目

弱王天皇と斬殺も終ると大。猶傳十七。源君の詩。下
長谷王黒日子王子告ゆあ。不驚而有緩怠之心。鉤の下可考
此人。心ざしぬらる。ねん。と。ま。何。れ。花。宴。卷。み。る。と
か。や。お。ち。り。も。先。此。君。と。光。り。終。へ。帝。も。い。り。で。つ。た。ろ。う。に
お。ふ。さ。む。な。い。と。ま。を。考。知。べ。し。大。方。ハ。思。人。と。志。深。う。い。疎。畧。な。る。
人。と。云。る。や。り。○。や。う。な。い。諸。本。よ。う。と。作。ま。ど。無。益。の。意。や。終。バ。此
な。り。や。く。と。音。便。や。う。と。云。ま。益。ハ。吳。音。イ。ヤ。ク。漢。音。エ。キ。な。り。吳。音
を。用。う。る。な。り。○。何。を。ま。い。古。吏。記。ハ。遊。行。と。ま。を。傳。ハ。阿。流。伎。と。訓。べ
し。万。葉。ハ。阿。流。久。阿。留。伎。な。り。あ。り。物。語。書。ハ。あ。り。く。と。終。と。又。て。終
バ。何。り。く。と。云。ぞ。雅。言。の。め。く。聞。ゆ。と。終。と。ま。の。り。や。り。と。云。終。ま
此。ハ。即。何。り。ま。と。ま。を。よ。り。さ。て。女。の。許。な。り。一。忍。何。り。ま。す。と。ま。を。よ。り

何りきと云又催馬樂といふ事きんやをしのかもきいづくゆりぞ
於毛ハ何りくこといふものぞあまはつ毛さきんふもちや葵卷子葵上
物気の処子源君 忍遊行の事と 思オホしなぐくに成ありまなど便ビなき頃なれ
身りど何り○よしぬしハ縁ヨシなし由ヨシなしぬどの意なるばらねど是
も即无益イタダク不用イタダクなりぬ意と字下御狩行幸の段子よしなく後方くも渡
終るぬ和泉式部集はなむねはほまくなむをりよしぬしるまぬりし更ど
も書付し子宇治拾遺卷八志貴山命運る段もこれ國信濃へ歸りぬと思ひぬ終
どもよしぬしる無佛世界のやうなる死へ歸りじりぬ何り○猶
云々ハ健冬ハ名高き色好なまども云終ハ此名を致と云つまきど猶
とぬしる種なまぬし○色好といぬる限ゴシ五人古板本よりつ

抄本より五人と何れ古今序子色好の家伊勢物語卅九子源至と
云天下の色好なりぬど何り○思やむ時なく夜晝ヨレヒキ來なり板本より多
止まりぬ古板本より來たりると何れと類本より從て削つ
ゆゑいひら石作イシツクラノ皇子ミコ一人ハ一ハももぬし一人ハ右大臣アベ何れ
のみし一人ハ大納言オホノミヤゴのと由ゆにはるもハ中納言ナカノミヤゴ石上イソノカミの麻呂
もハ此人ハよりなりぬ

○此段類本写本ハ其名ども石作の御子とるもちハ源子と五
人次書はけけ一人ハと云くるもし其も宜ヨシめ終ど此物語の
文体す言と重オモく云る更多り終バ此も一人ハ云一人ハ云一人ハ云と細ミカ
み云るど宜しるも思ひぬ故カ今ハ抄本よりつさて何れの

こゝの下の大納言一人ハ大伴のミゆキ中納言一人ハ石上麻呂
 じらゝのミよス錯置いゝゝを疑はる候ハ例よりて改つ○石作のみ
 己九皇子ハ御名の例文徳實録_{卷一}先朝之制每皇子生以乳母姓為
 之名為故以神野為天皇_{嵯峨}諱とてゝり
猶皇子の御名れる
委記傳九上も又也石作車
 持_{ミチ}なりハ乳母の姓なるゝし取るなり石作とてハ佛の石鉢を
 偽作_{イクラシク}せり更云すゝとて設_{イナデ}ぐる名なり姓氏録_{左京神別}石作連火明命六
 世孫建真利根命後也垂仁天皇御世奉為皇后日葉酸媛命作石指獻
 之仍賜姓石作大連公也と有り續後紀_{十下十}石作王と云又也○
 々々々々此皇子ハ姓氏録_{左京皇別}車持公上毛野朝臣同祖豐城入彦
 命八世孫射狹君之後也雄略天皇御世供進乘輿仍賜姓車持公と有

己續紀_ミ車持朝臣の人多く又も同姓欽車とクラと稱ハルマの切
 ラとてハバれ_ミ。さてとて拵乃皇子と云名を設ぐるいゝゝハ阿倍の
 意取_ミ偽_ミは_ミよとてとて思依_ミなるゝとて偽_ミなる候
 あり心やも阿倍_ミ更_ミな_ミと云又博奕_{バクヤク}する者此道理_{スサ}なるゝ更_ミす
 をとてとてと云采_{サイ}子操_{マツラ}を構_{カヒ}て人を謀_{カニ}とてと云とて○右大臣阿
 倍のみ_ミ。しハ諸本左大臣阿倍のみ_ミ。しとかき寫本_ミハ此_コ右
 大臣三字を脱して末_ミハ右大臣とあり繪合_{エヒカヒ}卷_{マキ}引_{ヒキ}するハ阿倍
 のありしとて何_ニも御主人_{ミコウヂ}の誤_{アヤ}なり故_{ナリ}今左_{イダ}を右_ミとてしとて
 すと改_{カヒ}つ○大納言大伴のミゆきハ御行_{ミヨウキ}なり○中納言石上の
 ミゆき_ミ。此人_{コノヒト}もとて諸本_{シヨホン}もろ_ロなり此人_{コノヒト}もとて_ミ

今改つ。抑此三人の更田中道麻呂主云、此人、續紀に又くありむ
らしハ源氏物語に於しとまた從べしとむししとハ源氏御主人
を訓^{ヨミ}ひて心當り訓^{ヨミ}分^{ヨミ}つる。麻呂ハ名^ナもハ唯^タ下^カに續^{ツキ}く詞^{コト}なりと口自^{クチミツケラ}
云^{イハレ}はしと鈴木氏ゆつと語^{コト}終^ハま此説^{コト}をこと^ニ宜^{ヨシ}し書紀に持統
天皇十年冬十月己巳朔庚寅假賜正廣參位右大臣丹治真人嶋資人
一百二十人正廣肆大納言阿倍朝臣御主人大伴宿祢御行並八十人
直廣壹石上朝臣麻呂直廣貳藤原朝臣不比等並五十人、^ト何^{ナニ}と見
れば此三人乃名を借^カつるなりと云^{イハレ}○阿倍ハ姓氏録^シに左京^{サキヤウ}阿倍朝
臣孝元天皇^{コノノ}之子大彦命^{オホヒコノミコト}之後也と云^{イハレ}。天武紀^{テンブキ}に十三年阿倍臣賜姓^{ミケナヒ}

曰朝臣とあり○みしハ御主人^{ミウヂノヌシ}なり其と源氏物語に於しと云
も猶誤なり御ハ後世^{コノノ}ありんあ^ハなり呼^{ヨブ}あ^ハありしありしと訓
ひ^ヒの^ノみ^ミし^シハ^ハ流^{リウ}し^シと^トま^マつ^ツと^トあ^アむ^ムし^シハ^ハ字^ジし^シ色^{シキ}と^ト混^{コン}乱^{ラン}
してむの入り^ハに又^{マタ}と^トむ^ムと^トは^ハつ^ツる^ルものなり師^シ云^{イハレ}御主人ハ美宇
志^{ミウジ}と訓^{ヨミ}し古更記^{コシヤウキ}に丹波^{タニハ}比古多^{ヒコタ}須美知能宇斯^{スミチノミウジ}王^{ミコ}傳^{ツタヘ}二^ニと^トみ^ミと^ト書
紀^キに道主^{ミチヌシ}と^トあり奴志^{ヌシ}ハ能宇志^{ノミウジ}の切^{キレ}と^トあ^アて^テ大人^{オホタチ}なり此人の姓^{ナリ}天
武紀^{テンブキ}持統紀^{チツウキ}にハ布勢^{フセ}朝臣^{チウシ}と^トありて持統天皇十年の條^{ジョウ}に始^{ハジ}て阿倍
朝臣^{チウシ}と^トあり續紀^{ツキ}にハ阿倍布勢^{アヘフセ}朝臣^{チウシ}御大人^{ミオホタチ}と^トある処^{トコロ}も何^{ナニ}り布勢^{フセ}朝
臣^{チウシ}ハ姓氏録^シに阿倍朝臣^{アヘチウシ}同祖^{ドウソ}と^トありハ此人の族^{ウヂ}と^ト布勢^{フセ}なりしハ
阿倍^{アヘ}に改^カら^レし^シなりと云^{イハレ}。阿^ア字^ジ古事記^{コシキ}書紀^{シキ}續紀^{ツキ}姓氏録^シ等
にハ阿^アとの^ノと^トあり續後紀^{ツキゴキ}にハ

安字を用く今ハ多く安との用より倍ハ皆倍
と云ふも李部王記に安陪氏と作るも
年八月丁卯阿倍朝臣御主人大伴宿祢御行並授正廣參褒善政也
大寶元年三月甲午授大納言正廣參阿倍朝臣御主人正從二位中
納言直廣壹石上朝臣麻呂正正三位同日以大納言正從二位阿倍朝
臣御主人為右大臣中納言正正三位石上朝臣麻呂為大納言同月壬
寅賜右大臣從二位阿倍朝臣御主人絕五百疋絲四百絢布五十段整
一万口鐵五万斤備前備中但馬安藝國田二十町同年七月壬辰勅先
朝論功行封時賜大伴連御行阿倍普勢臣御主人十一各一百戶按
大伴宿祢御行ハ此年正月薨き其後連と云ふは別人の
と云ふは御主人ハ阿倍普勢臣とあり別人のハあり今ハ壬
申年の功に隨て賜封され即其壬申の記
子然何の依り此も記さるるなるべし
同三年閏四月辛酉朔右

大臣從二位阿倍朝臣御主人薨遣正三位石上麻呂等弔賻之難波朝
左大臣倉掾麻呂之子也難波以下十三字書紀と有り當時左大臣ハ
多治比嶋公なり御主人公ハ左大臣ハ昇り終は次下右大臣
と云ふは從て此も改續紀卷三子御主人公男廣○大伴ハ姓氏録左
神大伴宿祢高皇產靈尊五世孫天押日命之後也初天孫彥火瓊杵
尊神駕之降也天押日命大來目部立御前降于日向高千穗峯然後以
大來目部為天靱負部天靱負之号起於此也雄略天皇御世以天靱負
賜大連公奏曰衛門閑廬之務於職已重若一身難堪望與愚兒語相伴
奉衛左右勅依奏是大伴佐伯二氏掌左右閑廬之縁也と云く天武紀
子大伴連佐伯連姓曰宿祢と有り○と云ふハ御行なり續紀子大寶

元年正月己丑大納言正廣參大伴宿禰御行薨帝甚悼惜之遣直廣肆
榎井朝臣倭麻呂等監護喪事遣直廣壹藤原朝臣不比等就第宣詔贈
正廣貳右大臣御行難波朝右大臣大紫長德之子也○
左京石上朝臣神饒速日命之後也
宇摩志麻治命十
六世孫物部連公
麻呂賜物部朝臣姓
記傳云此細書ハ後人の旧更記ヲ從テ出
改賜石上朝臣姓
加ハシテものなる也
連公ト公字を添へるハ例なきも舊更
記のこ然あらずなり物部連麻呂ハ天武紀ヲ出ふる終ハ朝臣の姓
を賜ハ信ハ此人麻呂の世なり又石上ト改まりしハ書紀ハ又
之終ハ同卷の末又持統紀ハ石上朝臣麻呂ト見
大秀云朱鳥
元年ハ三
年ハ石上朝臣麻呂ト見
四年ハ物部麻呂朝臣ト見
次ハ十八氏を擧ぐる如ク石上

とあはれ是ハ此人の世ヲ改まりしハ明々して石上ハ石上の神
宝を物部氏の掌オホて氏を石上ト改住地ハ即石上ハ在ハるハ終
ト云レヨ○麻呂ハ續紀ハ元正天皇養老元年三月癸卯左大臣正二
位石上朝臣麻呂薨帝悼惜焉為之罷朝詔遣式部卿正二位長屋王左
大辨從四位下多治比真人三宅麻呂就第吊賻之贈從一位右少辨從
五位上上毛野朝臣廣人為太政官之誅式部少輔正五位下穗積朝臣
老オシ為五位已上之誅兵部大丞正六位上當麻真人東人為六位已下之
誅百姓追慕無不痛惜焉大臣泊瀨朝倉朝庭大連物部目之後難波朝
衛部大華上宇麻乃之子也ト何々中納言なりし更ハ上ハ出さる大
宝元年三月甲午の紀ハ又々其日御主人公ハ右大臣ハ麻呂公ハ

かなづゝも 諸本にぬ見まひしと作をえまひしと云もやま目に
 見るまゝのあはれて得と云も逢と云も同意も違とぬし古今
安倍清行朝臣 袖をよみてぬむかひ人さへぬ目の涙やりけ
小野 小町 ぬむかひあふまをらうとせしぬむかひかまかぞ海士のまふ
師云こゝめさき浦といハ 小世継物語 五十 高藤公官路氏
逢はし身と云まかり 物もゆしめさびと
ゆめく親心 何さく人何さくも人えくこと寸まふと猶多の
○物もとさびハ末 天の羽 天皇姫の昇天を 憐づくまほひて
めはるも万葉 六 意夫君 我つひくくはるも何さびあるけども
安も何さび 苗さび君が心し忘のつよ○ゆめひつハ思侘つ
 つと云意ちあり○まびしつと書とやまどはハ抄本にほのとすれ

ども かく活ゆかけろふの日記は是を と何ハ遣とせし本を
始まく又くもおこすれどもとあり 〇ゆめひつハ思侘つ
无心者 假名ヲ作て記まなる此ハ意する男の方ヲ付て云る詞
なり遣字 ハやハしるも又ゆめハと字書ヲ送也と註してや
るはるもの ハ此方より彼方ヲ物を送をいひたはるハ彼方より此
方ヲ送を云て 於下云ハ 古今 夏 詞書ヲ隣より常夏の花をこ
しゆゆもかりにまバ惜て此歌とよとてはるりハ 又 恋
ハゆめさくも文どもはゆめすてをみてはるりハ 常夏の花をこ
 得て○かきしもまハ此詞諸本よりたハ必脱るべけまバ補つ
 かきしも思ひぬおぼひさ人の海らち六月の思ひぬさる
 さり〜び〜り

○かひなきと思ふに幾度行ても目もえさるるまなむは
 てもうひちまは歩行と兼て思知とも徒まは得も不居して恋し
 催されつゝ何くま出で艱難辛苦をして通來るなり思へども
 來りりへ係まり○降水ハ十一月十二月ごろ風何く雪の降
 も又道を埋て歩行つゝまも氷まる夜の寒きもななり○照る
 づゝハ本居翁の云く照霆なり万葉九光神鳴波多熾孺と何るも
 冠辞より受ゆるハ鳴はつゝと受ゆるなりと云はる字書に霆雷
 餘声也又霹靂也又雷也或書に霹靂をハタ、ガミナリと訓也
 字鏡に礫ラウガイ石声止く日久又奈苗又カハ蓄声波とあるハ雷声は
 るゆと声を形容て波多と云る同例なり六月の地さへ割て照日の

暑も夕立して雷鳴るゝゝに不厭來る形り降水照霆ハ甚
 く省略する言なり宇治拾遺卷山上なる卒都婆子麓より峯を登
 ぼとせのしはば道遠よりなるを雨降風吹雷鳴と氷する
 よも又暑く苦しき夏ハ一日もあはれ必上り此卒都婆を見たり
 と何れ此の趣に似たり○さつゝ夜半よりハ障ともぐと云意なり
 万葉卷石上るるとも雨さつゝめや妹の何とむと云てしもの
 を貫之集子尾風子雨ふる時過バさなつゝいつく老ぬべし雨も
 田子ハさくらざりくも三句しハ宇治拾遺卷平仲本院侍役子許
 後かふる雨ハいりやどらばもさつゝんハむづら何と
 さつゝもこそくわど何り

此人ある時竹を染めてむすめはあはれとてしをさるる
まをすけのついでにたのなふ子なればんもせしむるにむ
あるといひく月日をすかす

○喚いでいかふ処抄本ハ皆よひついでしてとやうに作り諸本
子ハいでてとてさるるなり下皆同じ。俊隆巻子琴どもを取出
ゆ何と○手を摺のいすどハ抄本ハのいすどと何れど此言ハ
月日とるいと云へ係まゝババとてさるる宜し。夕霧巻子大將女二宮
子強に逢せ
とさるるを小阿古君さるる押立ミタケ一向なる所になはるるせむ
少將止る処ト阿古君さるる押立ミタケ一向なる所になはるるせむ
そと手をす。宇治拾遺巻東の男猿丸
十とととと猿手を摺てかむるのいすど
更子ゆゑさるる多かり。手と摺足を摺ハ為便方なく切なる時

よするにさるるなり故物を乞願と手然すれば乞願とて手を摺とも
揉手するとも云へ○なまぬハ不生と云ふ同じ。古吏記クニウミオオトハ為生成國
土奈何藤原君巻子此春子ゆかりなりて隠カケよしまなぐあり今ん
よ親子とさるるぬオと云へ○いすどさるるのいすど一本一本志
るのいすども何り異更なれば。空蝉巻子空蝉君を
悲け小処強て思へさるる
心心もさるるのいすど苦しき心思きとぬるる自の沸心心
さるるのいすどハ姫の上を翁が云なりとさるるのいすどハ不令シクガハセバ墮墮まゝ翁自
我更を云意かり何れも聞ゆべし○月日とすかすハ古板本後子後
つ抄本後子ぬくるとさるるあゝのいすど。古今雑上取とむる物後し何れ
糸後バ後力後とあはれ何れとすかすつ。哉。宇治拾遺巻六
初下子後世を

バヤウラツスゴ月日はあぢく過さうふあり。又^{卷七の}一丁の月日を於く
おぼゆるなり

かゝれば此人の家をかゝる物をおぼひのちを^カおぼゆる思ひ
やあむとすまじゆるやあむとあぢく

○かゝればハ上件をよひ言て心を尽しと行通ひ翁よこしとよ
更成^{コトナレ}づくもあぢく縁バと云意なり思止す^{モシ}と云一係^カまり○物を思ひ
の下に作てと云言漏^{モシ}るもあぢくゆわおぼゆる上も物もとく思ひ
つとあぢくハ元来^{モトヨリ}なりしやと云し○いのち派しと云もあぢく
抄の異本に^ハ祈^イひを^イとと云ハと云しと云んハ願字の音なり凡
物語の詞に^ハ祈^イひを^イとと云ハと云しと云んハ願字の音なり凡

みくグワンと云マ。土佐日記^{十二月廿二日の条}子^{和泉國}まで平^{タラカ}と祈^イひ

らつと云も本^ハと云んと云んを写^シりま^スるなり^テ祈^イひ願^ハも同意
なり^ハ派^ハ重^ハる言^ハなり○やあむとすまじゆると云を脱^スり補^ベし

と本居翁の云み^ハと云^ハけし^ハ後^ハつ赫映姫を得^テて種^ハり心を尽^ス
し^ハるも承^リ引^ガれば今^ハ為^ニ便^ニち^テて怒^ル心を止^ムるを祈^チなり。万

葉^ナ三^ノイ^ノう^ノて忘^ルるものぞ天地に神を祈^ヒど我思^ハす^ハぬ。又^三天^ノ
地の神をも我ハ^ハ禱^スて怒^ルとよ^ハお^ハか^ラつてやあむ^ハり^六帖^ノ第^五子

け^ハき人忘^ルらん^ハは^ハま^ハ身^ハそ^ハる^ハひ^ハお^ハく怒^ルと云^ハす^ハ猶^ハ
伊勢物語^{六十}の^四段^ノの^六怒^ルと云^ハし^ハ河^ハよ^キし^ハ御^ミ菟^キと云^ハ歌^ハの^六り^六り。

沙石集^{一の}下^ノハ^ハ熊野の某阿者^ハ繫上^ノ總國の女^ハ詣^リる^ハを見て係^ナ想^ス

して本尊権現に此意止むと祈しなむ同じ類ひなり

さしつゝもはひる男あつせさしつゝもあらと思ふもなほ思ふ心もなほ
あつたつものも心にさつゝあつゝ

○男合をさしつゝやいハ大和物語百州の故御息所の御姊つひの男
をさつゝと赫映姫と似つゝ其詞をぬちつゝ男あつせさつゝと云
ははどと伊勢物語井筒の段をぬちつゝあつゝもかかにも思の止まじ
けまバ又更し思やゝ翁さハとと遂ハ男不合で止まじつゝあつゝ
ずと自我心を思ふものこと又彼家を行通ひて志の深きよしを見ゆ
るわらり○あつたつものも鈴木氏云俗にムシヤウニと云意なり強字

とあつたつものも志ひてとも訓同意なり○心ざつゝをさつゝありく此

五人之形同様よりあつたつものも大和物語の菟原美女の段にさば
ら男浄沼男に似つゝ其の詞は是も彼も万志をさつゝは思
佐ぬとも見えハさつゝと云更さゝ怒る心ざつゝの深きよしを姫の
許す陸ぬぐ家人にさつゝまんとするなり貴人の御前ゆるさる
を目さつゝと云も始めて見く終やと云も同し下御狩行幸の段の段より更し又
さつゝとあつたつものもあつたつものも彼家を行通を云更上より云るのめし

あつたつものもあつたつものもあつたつものもあつたつものも
あつたつものもあつたつものもあつたつものもあつたつものも
あつたつものもあつたつものもあつたつものもあつたつものも
あつたつものもあつたつものもあつたつものもあつたつものも
あつたつものもあつたつものもあつたつものもあつたつものも

のまはしむるをウナタミナ承ウナタミナぎむむヘンまダ化モのちモを侍ウナタミナらむと云ウナタミナふウナタミナに
やうウナタミナこウナタミナもウナタミナ思ウナタミナひウナタミナもウナタミナなウナタミナらウナタミナしウナタミナとウナタミナいウナタミナふウナタミナ

○是をウナタミナ見ウナタミナ附ウナタミナてハ五人の人々其志の深きを翁見附ウナタミナはばえうち捨
かぐウナタミナ姫ウナタミナ子ウナタミナ告ウナタミナるウナタミナ形ウナタミナなり○又ウナタミナその子ウナタミナれウナタミナ佛ウナタミナハ抄本ウナタミナハ佛ウナタミナと云ウナタミナハ佛ウナタミナな
るウナタミナべし。いウナタミナふウナタミナくウナタミナ尊ウナタミナとウナタミナ親ウナタミナと云ウナタミナ我ウナタミナ仏ウナタミナと云ウナタミナ下ウナタミナ天ウナタミナ羽ウナタミナ衣ウナタミナの段ウナタミナも何ウナタミナが佛ウナタミナとある。
俊ウナタミナ蔭ウナタミナ卷ウナタミナ子ウナタミナ太ウナタミナ政ウナタミナ大臣ウナタミナの小君ウナタミナは何ウナタミナがほウナタミナけウナタミナみウナタミナらウナタミナうウナタミナまウナタミナなウナタミナらウナタミナずウナタミナしウナタミナそ○變ウナタミナ
化ウナタミナの人ウナタミナハ同ウナタミナ卷ウナタミナ子ウナタミナ仲ウナタミナ忠ウナタミナ琴ウナタミナをウナタミナ変化ウナタミナの者ウナタミナなウナタミナらウナタミナばウナタミナ子ウナタミナの手母ウナタミナも勝ウナタミナまりウナタミナ藤
原ウナタミナ君ウナタミナ卷ウナタミナ子ウナタミナ正ウナタミナ頼ウナタミナ公ウナタミナの子ウナタミナ世ウナタミナ界ウナタミナのウナタミナ人ウナタミナなウナタミナらウナタミナばウナタミナ此ウナタミナ族ウナタミナハウナタミナ人ウナタミナ子ウナタミナみウナタミナらウナタミナしウナタミナもウナタミナさウナタミナび
へウナタミナまウナタミナぐウナタミナをウナタミナのウナタミナ者ウナタミナなりウナタミナ天女ウナタミナ降ウナタミナてウナタミナ産ウナタミナむウナタミナるウナタミナやウナタミナりウナタミナとウナタミナゆウナタミナらウナタミナばウナタミナもウナタミナ此ウナタミナハウナタミナ変
化ウナタミナ人ウナタミナハウナタミナあウナタミナらウナタミナばウナタミナもウナタミナ男ウナタミナ女ウナタミナのウナタミナかウナタミナらウナタミナいウナタミナハウナタミナ寸ウナタミナさウナタミナもウナタミナ更ウナタミナと云ウナタミナへウナタミナ係ウナタミナまりウナタミナ○こウナタミナ

らウナタミナ大ウナタミナきウナタミナさウナタミナまでウナタミナハ抄本ウナタミナハウナタミナ此ウナタミナ程ウナタミナと云ウナタミナて下ウナタミナの傍ウナタミナの字ウナタミナを補ウナタミナへり始ウナタミナ其
子ウナタミナ後ウナタミナしウナタミナを是ウナタミナ程ウナタミナと云ウナタミナていウナタミナひウナタミナと本居翁ウナタミナハ云ウナタミナみウナタミナこウナタミナ程ウナタミナつウナタミナまウナタミナバ猶ウナタミナ按
にウナタミナこれウナタミナ程ウナタミナとあるもウナタミナこウナタミナ程ウナタミナと云ウナタミナ言ウナタミナを聞ウナタミナつウナタミナがウナタミナすウナタミナらウナタミナばウナタミナさウナタミナらウナタミナしウナタミナらウナタミナま
改ウナタミナつウナタミナらウナタミナばウナタミナ又ウナタミナこウナタミナらウナタミナハ必ウナタミナしウナタミナくウナタミナ誤ウナタミナるウナタミナを致ウナタミナとも思ウナタミナしウナタミナを更ウナタミナに。
六帖ウナタミナつウナタミナつウナタミナ不ウナタミナ等ウナタミナの證ウナタミナを得ウナタミナて本ウナタミナの宜ウナタミナしウナタミナに更ウナタミナをウナタミナちウナタミナりウナタミナぬ。六帖ウナタミナ第ウナタミナ六ウナタミナ帖ウナタミナ程ウナタミナもな
く散ウナタミナなウナタミナまウナタミナものウナタミナと櫻ウナタミナ花ウナタミナこウナタミナらウナタミナ久ウナタミナまウナタミナあウナタミナせウナタミナつウナタミナらウナタミナぬ。俊ウナタミナ蔭ウナタミナ卷ウナタミナ子ウナタミナ右ウナタミナ大
山ウナタミナの空ウナタミナハ至ウナタミナて母ウナタミナ子ウナタミナの客ウナタミナ人ウナタミナこウナタミナらウナタミナ烈ウナタミナしウナタミナ道ウナタミナハ打ウナタミナ越ウナタミナて歎ウナタミナの満ウナタミナくウナタミナらウナタミナぬ。
山ウナタミナを尋ウナタミナねウナタミナるウナタミナ心ウナタミナをウナタミナばウナタミナえウナタミナおウナタミナらウナタミナうウナタミナらウナタミナハウナタミナたウナタミナらウナタミナばウナタミナ猶ウナタミナのウナタミナこウナタミナらウナタミナもウナタミナあウナタミナ問ウナタミナは
へウナタミナぬ。明ウナタミナ石ウナタミナ卷ウナタミナ子ウナタミナ須ウナタミナ戸ウナタミナ浦ウナタミナまでウナタミナ何ウナタミナの報ウナタミナもウナタミナこウナタミナらウナタミナ横ウナタミナさウナタミナまウナタミナなウナタミナらウナタミナ浪ウナタミナ風ウナタミナハ
於ウナタミナらウナタミナばウナタミナ終ウナタミナえウナタミナかウナタミナらウナタミナばウナタミナ同ウナタミナ例ウナタミナの言ウナタミナちウナタミナなりウナタミナこウナタミナらウナタミナハ常ウナタミナハ物ウナタミナの負ウナタミナ数ウナタミナれ

女藤上童男童女歟然化生とを抄り引り作者ハ此語を下し思ふ
致○女ハ男子逢とを寸此九字抄の本行ハなくして異本とて小
字ヲ作り男ハと重なりて煩しきやと注し諸本ハ有ぞあるし
此古事記ハ伊邪那岐命ハ伊邪那美命ハ御合生子云と何れ凡て娶
字を其意ハメスア訓と○門ハひろく成と云ハも字諸本ひろく
の下ハあり類本ハとりて改つ門ハ氏といふ人の如く一家一門の
子孫繁昌と云と續紀の詔第ハ明父清岐心以仕奉が氏ハ門ハ
絶多麻治賜止云云ハ詔ハ先祖乃門モ減継モ絶あて官卷ハ源侍従
ハ東宮ハ参りよと云是ハ成出ぬべし門ハも廣げ氏ハも持べきし
もかく何處ハいづくも薄雲卷ハ源君秋好中官ハ明石姫數ナ
君の事とのけり詞ハ

源の如き人の信ハたひまきつと待遠なりやかやどけちかくとも猶
此門ひろげさせ給ひて侍ハ成まん後も數あへさせ給へたや
聞しはやくと源氏の一門繁昌ハ○いづれりさるるをたかくてハおえ
しあさむハ類本ハ後ろろ字ハ字ハ今補つ諸本ハおえとあるも
ろし翁男女の交合をなし子孫繁昌す。是人間の定法なる終ハ然や
こも爲べしと云勸るなり变化の人と申形ぐると云る結ナリ
かぎや姫のいくくちきよきとす。すのちとてむとらハ變化の人
とて女ハ女のまもるるおの何れハ限ハかきとす。かき
形むろし此人ハおき月を捨てかろのといましつこのいまも
思定てひまかよ何れもやけひ。祓とら

○なでよ何と云といふ言を音便に切て云る形なり此まで何と
 てと云意なり。推本卷に ハ宮薨おつるを姫君の 二人に成りつゝ
 御さまかへちをよぶに今一度又まゝとぬがしのいふまゝぞ 阿者利
 の答 なでよ なるべしと云はば是も同意なり○かゝつてもい
 如此ても音便に云るなり○いふべしなりと云ふ抄本にいふ
 きあしと云いふいふのいふまゝかゝるとも云て在字をよめり。伊勢
 物語 廿八段 昔西院帝とありて帝おしりしなり其帝の皇女は崇
 子とありいふまゝなり又 九十六段 堀川のおわいありち君と申し
 まどかたりと云ふれしと云同音にていさゝか カキカタ 輕方とはる
 ひつり。若紫卷に 尾君紫上のいさけ なきを致し詔す なま 今おのれ又持ちまゝにいり

で世にわんせんといふとていさゝかなくとも似たり。女ハ獨
 在つきにあり翁の在るなりハ此といふまゝ翁亡なりて獨り
 てハ在るにれハ男を定むるなり○ひつりくまハ師 記傳山佐
 の下 云一人 一人ハ幾人もあり何れ一人と云るまで其餘
 一人に對つて云る古史記に山佐知も己が佐と知くと重祿云ハ凡
 て物を對つて云時の古言を拾めて山佐知の方ハ海佐知に對へ海
 佐知の方ハ山佐知に對つて云るなりさる俗ハ 卷九 万葉 長歌 遠津國
 黄泉の夢に蔓つた各々向く天雲の別し往 ユキ 往ハ ウツ 此ハ弟に死をよぶ
 るまゝ只一人乃更なるを向くと重祿云る是世に留まる吾身に對
 つてなり。又古今 恋 歌に思ども一人てこの恋死 コヒシ 誰によもつて藤衣

人々を驚かす所あり

○思の如くは我思の如くなり翁も兼て然思居り其如く宣ふ
まひり。哉とて姫の詞を諾ち喜ぶまなり。○そもは鈴木氏
云く論語に夫子至於是邦也必聞其政求之與抑與之與とま同じ
く按て奥に義の字を以てましくは訓なりと云はき。按て俗言に
ソレハニアとて其意をやひ又文の中間に言立て其更と語る始に云
まに聞ち貫之集蟻通の神めくしげまなりやましく何の神との
申とせむ。土佐日記正月七日の条に抑つて讀むまを思ふし
○かごころの恋慕ふ五人の如此なり寒暑も不厭通來るを思ふ
疎畧ちぬ心も見わはれ此上志の深と云すハ如何様乃更ぞ

と翁の何れを問ふまなり

かごやひめいん何れを思ふまなり
のしむなり人の心ましくしむなり
かごやひめいん何れを思ふまなり

○かごにまなりハ古板本より抄本にまなりとまハい
ま作しと一字を寫漏きまなり。末摘花卷に源君琴と何れ
りまふこま手なり物との音の筋もものなりまなり
ま○人の志ひくしなりハ翁の云る詞なり。何れなり
まにま更なりと云るハ姫ハ既此更思依る由なりハ何れ
勝劣ハまむと云る殊更めまてゆえなり。まて此の文彼菟原を

めは段志乃勝らん予こそ何ぞめを思ふ予志の程も同様なり
やみそ逐々鳥を射て思依しとゆへに物之を云ふと似る
と
五人のひやぶすやゆへにぬえをけしむはあはれしきなり
るりしはのしはしきもあはれしき人々よあはれしき
とよあはれしきなりと云ふなり

○五人の人は「諸本人」と云言なきは脱きぬるべし写本は後
加つ○ゆへに物に見まらしき由なり枕冊子は空くゆへに物
人の子生るる思ふ人のあはれしき文、幕木卷の段、近き御厨
子なる色これ氏なる文も引出て中将よりあはれゆへにけはき

アぬごき少しいんせん片をたのぶきもこそと許しぬるねは其打
解て傍痛しと思はれぬるゆへに速○御志まさりなりと云
ハ皆等しき御志なるは一方より定へる縁はゆへに物賜ひし
らまは定傳しきなり○よは更なりぬる翁の答なり諾る由
は答皆あはれぬるなり枕冊子は
大進成昌の家は皇后行啓の時成
昌清少納言の寝る所に来る
更を話消息とするはよのけり誰のいさす宇治拾遺卷の宿
処は
今夜をかり宿させぬひなんやと云はよは付なん入てははせと云
はるるほは傷の何つまりぬる或は笛をまよはるは歌を
ふひ或はあはれしきあはれしきあはれしきあはれしき
ねはすに於て飛出ているかきけたあはれしきあはれしき

かきつゝまをなげし物しはなまかひなまか
 まき

○例のつりよりぬ人。ハ抄本よりつり人。二字例の上より
 本も何と類本よりいなりし。○或ハ文どりに多々ありハと訓まじ此
 ハ下よりありハと假名加りより後で訓つ。○さるがさしハ笛
 の譜を謡を唱歌と云ふ。下若菜卷より霧拍子とりをさるがしハ院
 も時々扇打ちしてくくへり。著聞集卷六より大納言宗俊卿草子管
 絃蓋を拍子より打て万秋樂の序を唱歌をさるがし。○さるがさし
 口笛を吹たり。神代紀海神宮の天孫宜在海濱以作風招と云ふ。或
 註子風招即嘯也毛詩注曰嘯覺口而出声と云ふ。紅梅卷より
 按察大納言折梅花

如かきつゝまをなげし物しはなまかひなまか
 最秘抄より天慶五年正月七日引青馬酒盃十一巡王卿有酒氣吹皮笛
 今日李部王記吹嘯之由有之。源氏論義より天曆の比記より宴會
 時時諸卿入奥の餘皮笛を吹と云り同日の小一条左大臣記に諸
 卿嘯を吹と云ふ。亦文範卿節會は時皮笛を吹諸人嘲時寸と云ふも
 同じ更よりやと云ふ。此文範卿の更續古更談下巻よりハ嘯を吹きはと
 めより宇曾も皮笛も同更なりと知べし。○扇をたらしハ若鷲卷より
 頭中将懷より笛取出て吹寸よしかり并れ君扇をたらし打鳴し
 豊原の寺に西なるやと云ふ。上より笛吹唱歌しなるも
 思へど此も扇子もて拍子を取ら打なりはなまり猶扇をたらし

種々あり。著聞集好色子女房の局此子在と知らずとて扇

かちめと鳴して遣ひきたば。又今物語十訓抄薩摩守忠度阿宮

むら女房の物申さるる局の上めとあるひいじの殊に外夜

の更りて扇とそとと遣鳴して聞たきりきたば又狭衣上子狭

君昌浦言とちひまろ阿やま家共も只一筋つ置渡を憐に

ひつ扇を笛子吹はつ々々へ此ハ今世扇の先子帑と當り吹

めし然ども此ハ然ハあつて扇を笛のめなりの音チヤルメラと云笛の

く横つ々笛吹あつと志ひやあべしわざと阿り是れ物の音も

と姫を誘出さんと寸さるる今も係想する女の門に立ち手を

拍鼠啼ネムネさるる古今かゝる更おし〇かふとけなるとハハも字類本

よりて補つ。舒明紀四年十月唐國使人高表仁等到難波津云曰

風寒之日飭整船艘以賜迎之歡愧貴人の賤イザヤ我を恵メハ君の恥

れよべきものなり其をも不顧めみりつを歡意ヨシコトもて已ウちり君

を辱ウツカむる義あり故に君を崇アホカて已を謙意ヘンシヤルとなまり。桐壺卷いひ

はしふなきものありはと加ふけはま御心ごころを類なきを頼たのみ

るまはるる〇きつちげ形かたちの所ハ古事記ハ伊那志許米志許米岐穢

國書紀汚穢と积多キタク儼ナキ積とあり。万葉卷四ハいあちちお時まの妹

の律生ハムシの穢屋戸キタキヤト入ニおきむつものなり〇きはまりはかしこ偏

とあり抄本ハ阿ひののかしこあるるとあり宇治拾遺卷六ハ

孔子ハ叟スのいちくきくちちりてたのちま人みとあり又迷神子惑我

身ハ左京ハの官人ハなり九條ハもと止づきチかつる来つさきさあり

て由なしとて恐多き限と云意なり此門に立於山人皆貴人なれ
バ不承引を甚く恐惶しなり此めく詞を止て次子姫子談合する
由を讀るなり○さく次の條いづく詞の脱を補つる理と行中
子小書しと諭し

翁のい乃ち今日何事もなほかゝのいさふ君がらもよく思定
てはうらまひ

是ハ翁姫子夫を設ぶきをを勸するが姫の答なり
と五人子告る処を後バ次の申もてとてなりと云
言聞えと申をバ
と何りて次子先翁子答する姫の詞再
度出すべきなり故今申をハ三字補つ
ふの如き

一行を漏せしなりと申し
理なりと云ハ翁の意なり
と十二字
又漏
も再び
も再び
も再び

由はしと継ぐべ
と継ぐべ
と十二字
又漏
も再び
も再び
も再び

○此段ハ翁此五人の更を赫映姫子告しに姫の心様を五人子對て
告述なりとて姫子告る更ハ上に翁の申さむと聞かひてんや
と云々此世人ハ女ハ男子合更を云深き志をさしてハハハハ
しき扱えを云とて翁よきとて受つとて云々此
文再度云述べき知なり故右の如く前件を詞を省畧て出しつる物
なるは然を甚く寫脱漏しつるは解得ざるしを此補てハ熟く分
別なり今補つるハ例の点を差
○定べきとてハ諸本ハ此をい
下なるをいふハ錯置なるべしとて此五人並貴人なる

翁直子對て云言なれば云と云てハ无禮なきバ必申侍ると云ふも
知なれば然よむべし 上ハ世界の男阿てなるも賤しきも云ハ甚廣
き更なれハ敬言ハ无るも有ぬへし色好と云
る限五人と有よりハ皇子と始大臣納言めて貴人の限と定りつ
まバ加しこて來ひハ文を遺ひなど云べきと敬言なく只手と
摺のいあふとと云のこなり以上ハ地の詞なり又此人くまかろの
こいましつゝのいあふるを云と云ハ翁の姫子云言はく少異なり
翁出て云く云年月を経る物しゆふるより前件へ係てハ直子五
人のいあふ人子申言なればかくのいあふ君がちも云勝劣あらし
あふぬハ云なむ少し无礼げなる更なしされバ此も必申ふべしと
あふべきなり元て地の文ハなめく書くまとも對てハ恐て云
文あり

こはよびるなり人の恨も老まじとりて五人の人ともよきなり
とりてあひりていふ ハタニハ

○是よきなりハ翁が詞なり○いへハ地の文なり上も云る如

く此ハりふと諸本も此ハ姫の詞を翁の諾する由を五人も告る
なりりふとりてと不取更てハ御志の程ハ又云へしと云るも翁
此詞とゆふよきなりと云る五人の詞とゆふ解べうべきと
此も下らせバと不云でハなめ 地の言ゆえ左
ハ訓と改つ ○よびるなりとい
いへハノタニハと云へしと文の地なれば難ハなし○入て
りふハ翁入て五人の諾するよしと姫子告云なり
かへや姫石作のいふハ天竺佛の歩るハ鉢とらふものあり
そはをぬくはといふ

○天竺は諸本もなきと校本も從て補つ師 玉勝間
卷四 云源氏物語ハ佛
御迦陵頻迦の声御一腹官の御侍役のめむやと何は是の御

言今世の心も思へず佛の迦陵頻迦の御声など云べきも置
 如更カクてゆふと云まき此も此定めて佛の石鉢御鉢と云へくゆち河
 社ノ佛の御石鉢ハ西域記ノ波刺斯國ニ釋迦佛鉢在此王宮ノ南
 山住持感應傳ノ世尊初成道時四天王奉佛石鉢唯世尊得用餘人不
 能持如來滅後安鷲山與白毫光共為利益四天王ノ一の石鉢を
 奉ルを佛四を重て按て一とカシはつる鉢なりと云抄ノ續博物
 志ノ佛樓沙國有佛鉢受三升許青玉也或曰青石或曰雜色而黑多四
 際分明厚可二分貧人以少華投中即滿富人以多華正復百千万斛終
 不滿或曰在月支國ニ水經注ノ西域有佛鉢今猶存其色青紺而光
 以上和名抄僧房子四声字苑云鉢博末反俗學佛道者食器也猶別記
子出

一ハ姫ノ翁ノ告ル言ハ

持ク子ノ東ノ海ノ邊ノ一ノ山ノありて其ノ石ノ根ノ
 一ノ山ノありて其ノ石ノ根ノ
 一ノ山ノありて其ノ石ノ根ノ
 一ノ山ノありて其ノ石ノ根ノ

○蓬萊山の更ハ列子ノ渤海之東有五山岱輿員嶠方壺瀛洲蓬萊也
 其上臺觀皆金玉也珠玕之樹叢生而五山之根無所連着隨潮波上下
 不得暫時焉帝恐流於西極使巨鼈十五擧首而戴之迭為三番六万歲
 一交焉國議卷ノ左大将殿大なる海形を以て蓬萊山の下れ龜乃
 腹ノハかノ入ル山ハ黒方侍従ノのえ香合ノ物
 造王ノの枝並立ノりノ玉枝ハ蓬來

のよハあゝ孫ど淵鑑類函に洞冥記云大初三生東方朔從西那國還
得風聲木十枚實如細珠風吹枝如玉聲有武事則金革之響有文事則
琴瑟之響上以枝賜大臣人有病則枝汗將死則枝折里語曰年未半枝
不汗此木五千年一濕萬歲一枯縉雲之世生阿閼風也何ハ玉枝
に似たりと秦翁云みこととけき

今ひやりのみはもつこつこつ何ハ火鼠の皮をさる

○是ハ右大臣安倍のみしちり此ハ名と出さず今ひやりと云る
おもしろし○火鼠の皮をさるハ諸本かきぬも皮をさるも
何と何と云ふものぞと教かかるともと云ふ後一方法定つ
猶六帖に皮をさるもの題にやと云ふ夏冬ゆるや裘扇をさる山

住人 万葉卷九詠仙 人形歌なり 万葉 十 弥彦の神のふもや今日らも鹿

の伏らむ皮服若而角附ちり 是ハ何れも宜き中猶又卷日

知命を カコモキテ 毛許呂裳遠春冬かまけく幸す宇陀の大野ハたもほ

えり 布也加波已 呂毛又弥乃 和名抄子説文云裘 音永和名加波古

皮衣也末摘花卷子ハふるまは皮きぬ十訓抄子 右衛門督伊勢卿

し 菟裘賦をさるまは 何れもと云て笑まし更何と凡皮をさ

しと云る方多くゆり 和名抄子神異記云火鼠 和名

比祢 須三 取其毛織為布若汚以火燒之更令清潔 以河社子吳録子云く日

南北景縣有火鼠取毛為布燒之而精名火浣布 吳録ハ張勃撰州卷今

搜神記子云く崑崙之墟有炎火之山上有鳥獸草木皆生於炎火

之中故有火浣布此山非草木之皮采則其鳥獸之毛也漢世西域獻
此布中間久絕至魏初時人疑其無有文帝以為火性酷烈無含生之氣
著之典論明其不然之事絕智者之聽中刊百十廟門之外及大學与石
經並以永示來世至是西域使人獻火浣布袈裟於是刊滅此論抄子
本草綱目に時珍曰火鼠出西域及南海火洲其山有野火春夏生秋冬
死鼠產其中甚大其毛及草木之皮皆可織布汚則燒之即潔名火浣布
以齊東野語子昔温陵有海高漏船搜其橐中得火鼠布一疋遂拘置郡
帑凡太守好吏者必割少許歸以為玩外大夫常守郡亦得尺許余嘗親
見之色微白頗類木綿絲縷蒙茸若蝶粉蜂黃然每洗以油膩投之熾火
中移刻布與火同色然後取出則潔白如雪了無所損後為人強取以去

以華夷珍貲考子岑樓慎氏曰予閱昆峯傳火浣布與蕉麻無異而色微
青黑因憶少年閩中死見火浣布無以異以上太平御覽子晉書と引て
云く外國進火浣布晉武帝為袷衣未幸石崇家崇家奴五十人皆衣火
浣布袷帝大慙是ハ今の晋書子ハ无抑上子引る諸書於此外ハ多
ハ畧ハ皆火鼠乃毛を以て織る布なり此ハ其布ハあるて其
皮ちぢる衣と云更ハ其殊子得るべき由あるべし

大傳大蛇ハ龍ノミのそハにハるハ色ハをハひハるハ玉ハをハ所ハにハてハぬハべし

○龍ハ和名抄子文字集畧云龍ハ力鐘反和名大都四足五米甚有神靈者也白
鹿通云鱗虫三百六十六而龍為之長也之也○首の玉ハ莊子雜篇
子莊子曰河上有家貧特緯蕭而食者其子没於淵得千金之珠其父謂

其子曰取石來鍛之夫千金之珠必在九重之淵而驪龍領下子能得珠者必遭其睡也使驪龍而寤子尚奚微之有哉沙石集卷七恒河の邊に梵志ありて梵行を修寸河の中より大蛇出でて常より身に寄せて終て馴親トシテむつふをくむつゝ覺て佛ホトケに歎申に佛のハはく彼蛇ハ玉賣マシまやと問ふ首カビ子持て侍ると申へりて其玉をこりて仰らるゝとて梵志其玉をこりて汝チキハ少欲知足なるをうこそ形カむ〜〜思ひ〜むつ〜はる我玉ハ只一とて宝なり與ふべし〜
 ぐ〜其後ハ不來と有り似るまなきが引つて下ノ云へし○五色ハ字音子唱し

石ノ子ヲ始メ〜ハハはハ〜めハ〜〜子ヲ安ヤス見ミひハ〜〜
コヤスセ

○は〜〜めハ和名抄子爾雅集註云鸞和名豆波久良米白脰小鳥也とる字鏡ノハ種々ノハ字を出して皆つゝ〜と訓ヲヲヲ野冊子ノ委ク云フ○子安貝ハ子安の貝との字ある本ハ〜既ニ子名目と成ルハのノと不ス云フ例ヲ〜記傳ハハ尋殿十握劍ナリ〜下ニ師ノ説ハ〜何ヲ可考ト今ハ抄本ハ无キ子ノ有りつ抑子安貝と云物ハ今ニ世ヲも〜産婦ヲ握持ス〜むきバ産安〜と云ハ是レ机上に置テ紙ヲ摺テ光澤ヲ出シみよし貝光祿と云物ナリ此ハ鸛ノ持ル〜其貝と得ル〜云フ欽河社子史記三代世表第一ニ云ク詩傳曰湯之先ニ為シ契與父而生シ契母與姉妹浴玄丘水有シ燕銜卵墮之契母得故含之誤吞之即生契索隱曰按史所引出詩緯故曰詩傳曰殷本紀云玄鳥翔水遺卵城簡狄取而吞之契生而賢堯立為司徒姓之曰子氏子者茲茲益大

也詩人美而頌之曰殷社詩云 天命玄鳥降而生商商者質殷號也
見ハ燕の卵の子胤と成ル 然かいハかいこの意のくも思へど
燕ハ産のるハ由何ふやな終と猶物遠しある三才圖會に石燕
出零陵郡形似蚘而小或云生山洞中因雷雨則飛出墮於沙上而化為
石今人以催生令婦産兩手各握一枚須史子即下採無時とハ營の
石ハ化ふるもく握持く産の安まハ似つ終と貝子ハ何くんある
西京雜記元后在家嘗有白燕含白石大如指墜后續筐中后取之石
自剖為二其中有文曰母天地后乃合之遂復還合乃寶錄焉後為皇后
是ハ燕の持てる物あるハ似つ終と貝子何く 以上ハ河社又
取く大秀 又西陽雜俎段成式郡後有言少時嘗毀鳥巢得一黑石大
論を加つ

如雀卵圓滑可愛後偶置醋器中忽覺石動徐之見有四足如綫舉之足
亦隨縮或人是酥貝なるべけまハこやハ衍字子
只酥貝なる故と云まて用ひし 是ハ鳥巢中ハ物有
るハ似つ終と由ちし本草綱目ハ時珍曰人見白燕生貴女故燕
名天女ちと阿まハ燕ハ産のるに故ある多し正々當然ハ更ハ
なる終と右等の書ども思て子安貝と云物も何終バ引合て作連
るあるべし〇ひつとまる抄本ハならず

於手終のもますまずもよもこもには終此圖ハある物も何くんある
かくかつひこやまいバいつた申せんといふから何のかいのまむ
といふは終のもますまずもよもこもには終此圖ハある物も何くんある
ゆめらしももますまずといふは

○かづ比更ともありしを何れか。いとも云言字本に從く加つ何れ
 終ハ諸本何れを校本に從て改つ。かづ比の俗にデキニク
 イフと云るは同じ。河社に詩に云く由醉之言俾出童殺注云童殺魚
 角之殺羊必無之物也。箋云殺羊之性牝牡有角史記封禪書齊桓公既霸會諸侯
 於葵丘而欲封禪管仲曰於是管仲睹桓公不可窮以辭因設之以事
 曰古之封禪部上之黍北里之禾。索隱云韋昭曰設以不可得之物所以為盛江淮之間
 一茅三脊所以為藉也東海致比自之魚西海致比翼之鳥於是桓公
 乃止。以上刺客傳荆軻贊子索隱云燕舟求歸秦王曰烏頭白馬生角乃許
 耳丹乃仰天歎烏頭即白馬亦生角風俗通及論衡皆有此說仍云廐門
 木馬生肉定也。何れを是らば諸書の意をくはりとも今昔物語に

を雷イダチす。優曇華ウツナムニナルワミす。不鼓鳴鼓と得ま。云々○この中申さるる云
 ハ何イハうエウニシキも不可得難題なれば翁此人をいひて云出む
 附ツキち心苦クシく思て猶豫ウヤウヤなり○かまはかきまは抄本よ何
 まかマカもあは。陽炎日記解環中五も然シカり。土佐日記終のハ諸本終
 如くイハもあは。のくまきイハりモアを切ツツく。云るイハり何イハるも有
 ち。○かイハもあは。ハ向イハく下イハに申イハはると云言を畧イハると姫イハの云くと
 申イハはるなり○見イハき。ハセイハ字抄本に補イハはる後
 〇かイハらるるハ落凹物語卷中納言の四君子男君更ニの男ニを合ニはる処ニ我ニと云て人ニ求て

娶きんしのふまへぎ女君のせしめしめ辞とみださば狂いしもの
 よしきとせしめあくの。上若菜巻源君よりずむ子臈月夜君子逢ゆ子
を紫上子語ゆくハ中空なる身の
 為苦しとて併サマに涙ぐこみへハ源氏の言まか安あぬ御けしきこそ苦しけれ只おひ
 らこのよ引ヒキ摘ツミなむしと教ヲシへしなむしあり契冲法師ハ俗オオナシ
 ウ師ハジンシヤウニと云ま當たりと云まき於此ハ手短ウ无造作
 ニかの云意わすし鈴木氏云はき〇何なりよまぶハ邊をぐんと
 云意なり古更記肥川 上段ハ著從其河流下し何る傳ハ今の語なりハ從
 其河上と云まきと如此云るハ古語のさぬなり後ハ衰の意ぞ須磨
 卷ハ沖より舟とぬ謠のしきし漕ゆく古今春下深養
父牙の詞書ハ
 山川より花の流るる水よめしきと同一と云はき〇な何りきと云

此ハ赫映姫かくとも不可得物とゆきしとるハ畢竟我等と嫌キヤハ
 りよるちめれ然回遠シホく云まよりハ一向テニシカハ手短く我家の邊アサハ勿寄ヨリク
 來とのしきしと云るあり下龍首玉の段トキハ家ハ邊ぐた今ハ通トキじ
 とるハ大納言の方より疎ウツむ意ウツく此の反ウツなり〇まんとて此言ハ
 人字と省てうしと云る後撰雜詞書ハ世中と思ましと傳るる
 比業平朝臣住佐ぬ今ハ限と山須磨巻六条御息所一節憂まと思
 里子妻木推へき宿求てを源聞えさせし心誤源ハ此御息所思ひまんで別源ひみしと
 さふ云たど何と抄字書ハ憤字字を當り字書ハ房吻切周語陽瘴憤盈
 註積也鬱積而怒滿也と何りウ
 ンの音なり昌抄喜抄よ抄季吟翁枕冊子抄四抄ハ温字抄なりと云はき切説文
 怒也本作愠廣韻恚也倉頡篇恨也恨ハ恨怒也又倦或ハ憂憂
 ハ无と字も集韻紆勿切音鬱心所鬱積也ハ然ハ然ハ

のち〜と云人も何まで然何〜ハ直タカにウミテウクテな〜と云
 何レも直ヨシ〜と云ゆえ此言ハ困コウじ調テウじ怨エムじな〜ハ類め〜必字音とこ
 そ関え〜故按コトマ 慍ウツ字マと鬱ウツの同音 鬱ウツ字マな〜し字書マし 紆物
 切音尉ウツ説文木叢生者書五子之歌鬱陶字予心疏ニ一憤結積聚之意
 と何レり。侘果ワハテマ心の結ムスぶ〜意と関わ〜ハ此字よく當マる。此
 ツと省マテウシニ〜ンニマ轉シテウシニ〜云例ハ屈クムシとクシニ〜クン
 シニ〜云ニ。須磨ニ卷下十二マ打マ〜と思シ〜に。竹川ニ卷下十三マ我身
 多ク〜と云〜。葵ニ卷下四マ思シ〜して多ク〜を考カテウ
 ツとウニ〜云ニ〜と證サトル〜し

竹取翁物語解卷一

